

# 映画「学校」をみる!

—新潟大学地域上映運動に参加して—

「学校」みよう'94実行委員会

六月五日、日曜日、天気良好——映画よりもである。私達の頑張りを通じたのだよ、きっと。前日の試写もバッチリだったし、看板も作った。会場準備だって万全だ。あとはお客さんを待つばかり。——来たぞ、来たぞ。どんな来る。嬉しい、嬉しい、嬉しい!! 「山田洋次監督が新潟に来るらしい。その一環として映画『学校』の地域上映運動をやらうと言う話があるんだって。新大でやってみようか?」院生二年の小池さん、四年の河口さん、松原さん、渡辺さんの誘いのもと、十名の学生が集まり、「学校」みよう'94実行委員会が結成された。

人は集まった。やる気も十分だ。さて何から手を付けよう……。 「このような大プロジェクトを学生の手で果たしてできるのか」と不安に思った方々は多いだろう。その通りである。表情には表さないが、不安を感じた実行委員は多いはずだ。先の見えない計画は誰だって不安なものだ。しかし、ここ

は若さで乗りきろう。大丈夫、やればできる。

県実行委員会、松竹の小室さんのアドバイスのもと、早速準備が始まった。ところが、会場どりから難問続出。講義室借用許可がおりない。小林昭三教授の力を借りて、ようやく会場が決定した。教訓——根回しは大切な仕事である。

まあ、場所も時間も決定した。チケット・ちらしも心をこめて作ったぞ。あとは宣伝、販売だ。一人十枚手に持って、いざ出陣。とりあえず、友達なら買ってくれるだろう。ところが、ところが、そう考えたのは甘かった。みんなのサイフのひもは、意外と固かったのだ。「コンパやカラオケでは、サイフのひもはすぐ緩むのに、なぜこのような文化的な鑑賞には目を向けないのだろう。」そんな疑問が幾度も頭の中をよぎったが、ここでへこたれるわけにはいかない。地道に一人ひとりと交渉して少しずつ売っていった。また、

昼休みを使つてのピラ配りは、ほんの少し恥ずかしかつた。でも、「多くの人たちと一緒に映画を見て、一緒に感動したい。」という実行委員の気持ちが強かつたから、雨の日も頑張れたのだろうね。チケット販売は学生だけの力ではない。多くの教授や生協のみなさん、内野地区の自治会長さんの協力と温かい声援があつたから、私たちは最後まで頑張れたのだと思う。

ところが難問は絶えず襲ってくる。チケットの売上げ数が思うように伸びないのだ。不安が色濃くなってくる。どうしよう……。そんなとき、「元氣」を持ってスーパーマンがやって来た。山田洋次監督である。「山田洋次と語る<sup>94</sup>」の交流会でお会いし、私たち新大の実行委員会のために、励ましのエールを送ってくれたのだ。もう、涙が出るほど嬉しかつた。「あとちょっとだ。頑張ろう。」みんなの顔に笑顔が戻つた。みんなの頑張りを通じたのか、残り一週間となつて売上げ数は急激に伸び、

一〇〇枚を突破した。嬉しくて、みんなの顔はほころびっぱなしだ。実行委員会がすごく楽しい。私たちが楽しくやれば、まわりの人たちは自然と寄ってくるんだ。そうだよ、楽しくやればいいんだよ。

六月五日当日、一六五人の観客と一緒に笑い、一緒に泣いた。映画はやっぱり大勢で見えるものである。「黒井先生のような先生になりたい。」「学校というのは本当はああいう所であるんだなあ。」「ほんとうの勉強ってなんだろう。」「アンケートを通して、お客さんの様々な考えを聞くことができた。また、七十歳のおばあちゃんが「入学してみたくなつた。」と映画を観て感じたことを知り、胸がとても熱くなつた。考えることは人それぞれだけれども、ちょっと立ち止まって教育について、学校について考えてくれた、それだけで満足である。映画を上映して良かったなあと本当に思う。

収益金は、豊栄の若草寮（家庭に代

わる働きをする養護施設）の子どもたちにも映画を見てほしいということ、豊栄上映会のチケットをプレゼントした。

山田洋次監督の送つてくださったエールの中にこんな一節がある。

「現実とはなかなかこうはいかないかもしれない。しかし夢を共有することで、ぼくたちは現実を変える、ほんの少しでも力を得ることができるとはいいか。」

心に響く言葉である。学校にはいろいろな問題が蔓延しているが、そこで先生はあきらめてはいけなかつたと思う。夢を捨ててはいけなかつたと思う。「学校」が楽しいところであるように、先生、元氣を出して頑張つて下さい。私たちもあたたかい先生になれるよう、自分を磨いておこうと思う。

最後に、私たちに力を貸して下さいなみなさん、本当にありがとうございます。山田洋次監督、いい映画をありがとうございます。

（新潟大学・学生）